

「第三者評価に参加して～事業者からのコメント～」

神 岳 保 育 園

今年度の第三者評価事業に参加させていただきました。

第三者評価事業への取り組みについては、保育指針の改定に伴う変更作業を法人内での協議を進める中で、この評価事業を視点に置いたものを含めて整備を進めてきたことから始まり、評価事業各項目の読み合わせと当園での比較対照を進めたことがきっかけでありました。この間、職員間での読み合わせにあたっては、進むにつれ戸惑いや疑問が現れ、なかなか先に進みまず、ひとつのことに話が集中しては止まり、また引き返しの連続でありました。しかしながらこうしたことが、これまでの保育の見直しに通じたものであることは間違いのないようでした。どうしてこのようにしているのか。現在実践していることは、どうしてやっていたのか？必要性はあるのか？などの意識が芽生え、次の会議で話し合われるようになり、以前とはずいぶん求めるものと取り組むものの姿勢が変わってきたようでした。

しかしながらいざ参加決定となると、どこから手を付けてよいのかというあせりの連続と、ここまで求められるものなのかとの疑問も生じたことでありましたが、評価事業の中身そのものが指定されている以上、これに対処したものの準備確認は致し方ないことでありましょう。その対応策として、これまでの読み合わせでの確認作業とともに、各項目の担当決めをすることによって各不足部分や修正作業への対応もどうにかスムーズに進むようになり、職員各々が責任を持って行うために意識の向上が見られ、その伝達することの大切さも学べたように感じます。

今回の評価事業に参加したことについては、総合的にはこれまでの保育の見直しとともに職員の意識改革のきっかけになったことは言うまでもありません。ただ職員においては、これが評価事業のための対応作業であったということに終わらないことを望むことです。

第三者評価を受けての実感は、「気づき」と「記録」です。日常の保育の中で進められていることは、職員間で十分に話し合いを進め、理念、目標に沿いながら、目的意識を持って策を講じ、準備を進め、実践していることであっても、立場の違い、ものの見方、考え方、その人の嗜好、人柄によって、いわゆる第三者が見ると見方は変わってくるし、視点をどこに置くかによってまったく異なる評価につながるものであること。自己満足の世界であってはならないこと、常に見られているということに気づくことでありました。そして実践していることを第三者が評価するうえでは、実践してきたこと、していること、これからすること、すべてが記録によるものでなければ証明できるものが無いということでありました。対抗するという表現は好ましくありませんが、事業をなすものの勤めとしては必然的なものとして受け止めなければならない事実と考えます。したがって不足するところは補い更に向上するように努めねばならないと思います。ただし、いい保育をしているとか、いい保育園だという評価をうけるということは、人が人を育てるといった人間関係がうまくいっているということ。信頼関係がうまくできていなければ生まれてこないものだと思います。それに足りるものは何なのか、職員ともどもこれからも求めていきたいと念じています。